

と有とて、あはざりければ、かみさうじにかきつけはべりけり、
こりはてぬにゑの初雁あさにする宿にもあらで人かへしつる

〔散木弄詞集雜〕十よしの山の君といふ僧の房の、たきのかみ障子にかきつけたりける。
瀧のいとみにくる人もなし

これをきゝて、すゑにかきつけ侍りける、

谷川の心ぼそさにかきたえて

〔明月記〕文暦二年○嘉禎元年三月十日、夜月明而映梅花、開紙障子望閑庭、

〔日本書紀皇極〕二十四四年六月戊申、佐伯連子麻呂稚犬養連綱田、斬入鹿臣、是日雨下、潦水溢庭、以カシロシト席障

子覆鞍作屍。

〔日本書紀通證二十九〕皇極席障子カシロシト所謂紙障子、視障子之類、漢語鈔障子、屏風之屬、倭名鈔、節亦作節、

〔儀式〕三踐祚大嘗祭儀

五間正殿一字、構以黒木、○中其堂東南西三面、並表葦裡席障子、

〔運歩色葉集〕須杉障子。

〔海人藻芥〕家々文事、各當家の文ヲ、車輿ノ網代以下ニ付之、或杉障子ノ縁ノ繪、或ハ唐紙障子ノ文

等、一切ノ家中家具ノ蒔繪以下ニ、皆家ノ紋ヲ付ル也、

〔明月記〕嘉祿三年○安貞元年正月廿日庚午、今日杉板障子三間畫圖了立訖、女繪文字木書之、

〔秋の夜の長物語〕更行かねのつくくと、月のにしにめぐるまで待かねたる所に、からかきの戸

を人のあくるをとするに、書院の杉障子よりはるかに見いだしたるに、○下

〔下學集〕下視障子フスマシヤウシ

〔易林本節用集〕不視障子フスマシヤウシ